

『生命のざわめき、水辺のにぎわい ～水辺環境の未来と生物多様性』

企画グループ サブリーダー 後藤 勝洋

1. 本書の目的

2010年は国連が定めた「国際生物多様性年」であり、10月には愛知県名古屋市で「生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)」が開催されました。生物多様性の保全は、地球環境問題への取り組みの一環をなす重要な課題ですが、「生物多様性」という言葉は抽象的であり、私たちの身近な問題として把握しづらいように思われます。

本書は、「生物多様性」を「生きものの賑わい」と表現した岸由二氏（慶応義塾大学 教授）にならい、足もとの自然（特に豊かな生態系をもつ水辺の自然）の保全および持続可能な利活用に目を向け、生物多様性の保全への関心を喚起するとともに、とくに長年リバーフロント整備センターが関わってきた「多自然川づくり」などの自然再生・復元をはじめ、自然科学以外の視点も交えながら、人と自然の共生のあり方を考える一助となることを狙って作成・出版しました。

2. 内容

本書は3部構成で、『なぜ今「生物多様性」なのか?』、『「生物多様性」をどうとらえるか』、『水辺環境の未来と生物多様性』をテーマとして、「生物多様性」を幅広い観点から捉えています。

『なぜ今「生物多様性」なのか?』では、「生物多様性」という言葉を初めて聞く方にもわかるように、「生物多様性」の定義や、COP10を含めたこれまでの経緯を示しています。『「生物多様性」をどうとらえるか』では、「生物多様性」のスケールや人間社会との関わりについて、関係する専門家の方々がそれぞれの立場から言及しています。『水辺環境の未来と生物多様性』では、「生物多様性」の保全に向けて、水辺での取り組みを中心に紹介しています。

3. 構成（目次）

【巻頭言】

○生物多様性、それは進化（竹村公太郎）

【Part1 なぜ今「生物多様性」なのか?】

○生物多様性問題と国際社会

～「生物多様性条約」の目指すものとCOP10の焦点～（古田尚也）

○生物多様性を考えるためのBOOKGUIDE

【Part2 「生物多様性」をどうとらえるか】

○〈流域思考〉ってなんですか？

～ある知人との問答～（岸由二）

○「里」の保全と地域社会の再構築
～「生物多様性」が意味すること～（内山 節）

○「里山」を再考する
～民俗学のフィールドワークから～（菅 豊）

○魚を見て生態系を見ず
～湖沼生態学からの問いかけ～（花里孝幸）

○森・川・里・海を守り育てる
①三〇〇〇万本の木を植えた男（宮脇 昭）
②四万十川“半虫半魚”の日々（杉村光俊）
③「牡蠣の森」からのメッセージ（畠山重篤）

【Part3 水辺環境の未来と生物多様性】

○対談：川と創る自然共生型社会
～「多自然川づくり」を超えて～
（島谷幸宏×吉村伸一）

○多自然（型）川づくりの二〇年
～河川環境行政の変遷～（吉田邦伸）

○河川環境の生物多様性を考える
～保全生態学からの警告～（鷲谷いづみ）

○釧路川そして釧路湿原の再生
～これまでの進展と今後の課題～（中村太士）

○第二のカワウソがいる!?
～知床の自然に潜む生態系の危機～（村上隆広）

○翼にのせた夢 ～自然共生型の地域づくり～
①トキと共生する水辺づくり 新潟県佐渡市
（桑子敏雄）

②オオタカのすむ森を守る 千葉県流山市
（入松田倫子）

③コウノトリと生きるまち 兵庫県豊岡市
（大須賀護）

○和尚さんの智慧から始まった自然再生事業
～岩手県・久保川イーハトーブ世界～
（山畑泰子）

○地域の「ため池」に学ぶ
～兵庫県立農業高校の取り組み～（大須賀護）



A4版/72頁